

宮地建夫●

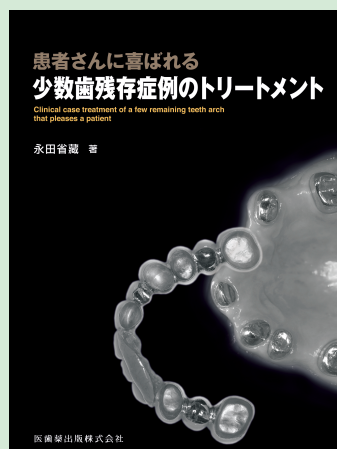
永田先生の本を鞆に入れて、上野の国立博物館に行った。「法然と親鸞」展が目当てだったが、本のこと頭から離れなかった。欠損歯列の捉え方に共感する部分が多く、“我が意を得た”という安心感や親しみが本書を離したくない理由であった。

「少数歯残存症例」では咬合支持が損傷し、消失状態にあることがほとんどである。そのため、本書の大半は「咬合採得」に費やされている。「咬合採得」つまり 1. 顎位の診断, 2. 顎位の決定, 3. 咬合器へのトランスファー, さらに 4. 微調整や術後のチェックの実際が症例を通して解説されている。特にゴシックアーチ描記について、臨床的効用を含め、これほど詳細に記載された報告は見たことがなく、ここが「少数歯残存」の肝の部分なのだろう。

欠損歯列とはこれ以上の喪失を止めたいという期待はあるものの、正面きつては言いづらいが、実際は“歯の喪失拡大を抱えている病態”なのかもしれない。この言いづらい属性についても、永田先生は決して意固地に排除せず、歯の喪失も含めて患者さんのすべてを受け入れているように感じる。著者の人柄もあるだろうが、歯の喪失も自然の変化の一部としてすんなり丸呑みしていることは、驚きとともに勇気付けられる。

21 頁の『患者さんとの心地よい関係 / 歯の喪失後も信頼関係は続く』つまり、「法然や親鸞」の以前から日本人は無常観を自然に受け入れられるようになっているのかもしれない。

少数歯残存症例の患者さんは、歯という視点のみでは劣等生であり、弱者であり、潔癖症の先生からみれば悪しき患者さんなのかもしれないが、過去の因果を不問にして現状を受け入れ、その後の欠損拡大も容認すれば、そこには機能再建への明るい未来が見えてくる。そうした自然体からだろう、患者さんの多くの笑顔を見ることが出来る。笑顔の患者さんに囲まれたいと願っている若い先生方は、義歯設計や技術論の前に、患者さんとうまく向き合うかの臨床姿勢をまず学ぶべきだろう。



患者さんに喜ばれる  
少数歯残存症例のトリートメント  
永田省蔵 著  
A4 判変型 184 頁 定価 13,650 円（本体  
13,000 円＋税 5%）  
医歯薬出版株式会社刊

永田先生は「少数歯残存症例」を重症化させないという意味を含め、積極的な治療が求められていることを冒頭で詳細に説明している。そして、歯科の中でこれほど劇的に治療効果を患者さんが体現してくれるステージは他にはないと言い切っている。そのことを患者さんが理解し、納得が得られれば、あとは永田先生のように「決してぶれない」臨床姿勢を貫くことである。少数歯残存症例では、あらゆる条件をそのまま抱え込んで、狭い道を踏み外さないで歩く以外にはない。

少し強引だが健全な歯列を善人とし、少数歯残存症例の歯科的弱者を衆生（悪人）と言うならば、本書からは「善人尚もて往生をとぐいわんや悪人をや」という悪人正機説のような「歯科医療の道」が読み取れるだろう。

本書を下敷きとして臨床を続ければ、自分の周りに幸福な患者さんが溢れ、そして自分もハッピーになれる。それは「歯科医療に従事していることへの誇りや充実感」に結び付くに違いない。ぜひ精読をお勧めしたい。

（みやちたてお 〒163-0804 新宿区西新宿 2-4-1  
新宿 NS ビル 4 階 歯科診療室新宿 NS Tel : 03-3344-4649）